
メタルクウラ帝国建設記

俺がベジータだー！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メタルクウラ帝国建設記

【Nコード】

N6533Z

【作者名】

俺がベジータだー！！

【あらすじ】

この小説は俺がメタルクウラ・コアだ！なんかもんくあつか？の続編です。主人公はかなり外道なのでそういうのが苦手な方は戻るを押してください。

第一話（前書き）

僕は戦闘民族サイヤ人　リリカルなのは編が行き詰って発表を中止にしたので変わりにこの小説を書きました。即席で書いたので途中で止めるかもしれませんが出来るだけがんばります。

第一話

前回のあらすじ。

なぜかメタルクウラ・コアになってしまった俺は最初わけがわからん状況に混乱したが次第に落ち着いてまいっかと第二の人生を楽しもうと思い、そして折角メタルクウラになったのならメタルクウラ帝国を築き上げようと決意した。

とりあえずそこら辺にある星を無差別に侵略して資源を奪いメタルクウラを量産。そしてついに500万体にもなる大兵力を手に入れたよ。

この兵力を率いて俺は地球に居るZ戦士達に奇襲攻撃をして難なく綺麗な花火にしたよ。

意気揚々とゲデスターに帰還したが突如目の前に巨大な次元層が現れ巻き込まれてしまうよ。

そして気がついたら何か時空管理局とか名乗る奴等が死亡フラグを言い放ったよ。

絶望的な戦力差の前に時空管理局は生き残れるのか!?

時空管理局の奮闘が今始まる!!

「何だったんださっきのは？」

あの後時空管理局と名乗る宇宙船がゲデスターに乗り込もうとしたがメタルクウラの気功波で難なく撃墜した。

しかしなんだ時空管理局って？ロストログアって？

まあ一つ分かった事がある。ここはドラゴンボールの世界では無いという事だ。どうやら次元層のお蔭で別の世界に飛ばされてしまったみたいだ。

まあ別に大丈夫だろう。こっちにはメタルクウラが500万体も居るんだし、それにメタルクウラを生産する設備も整っているから適当な星を侵略してさらに量産できる。

時空管理局がどんな組織か分からんがまた襲ってくるなら返り討ちにしてやる。

とは言ってもやはり情報が無いと少し心細い。偵察用ロボットを派遣してこの辺りを搜索させよう。

全く、面白くなってきたぜ。

次元管理局・次元航行艦隊・第23次元方面部隊は混乱状態になっていた。

突如現れた次元層反応の後に数え切れない程のロストロギア反応が現れ、近くを巡回していたXV級次元航行艦『トワイニング』に現状を調べさせるため向かわせたが、そこにあったのは巨大な宇宙船。ディスプレイに映し出されたその光景にトワイニングも司令部も啞然とした。

いち早く立ち直ったトワイニングは勇敢にも武装の解除とロストロギアの引渡しを言い渡したが、その巨大な宇宙船からは何も返事が無かった。

誰も居ないのかと思ったトワイニングはその巨大な宇宙船に乗り込もうとしたが、突如その巨大な宇宙船から1体のロボットが出てきた。しかもそのロボットからロストロギア反応が出ていた。

トワイライトはそのロボットを捕らえようとさらに近づいたが、そのロボットが右手を差し出した瞬間、映像が途絶えトワイライトの反応も消えた。

そこからは蜂の巣を突つついた様な騒ぎだった。

何せXV級次元航行艦があのでロストロギア反応を発するロボットに一瞬でやられてしまったのだ。しかもそのロストロギア反応と同じ反応が無数にあるのだ。

この次元世界は海賊が多いのでXV級次元航行艦は15隻。そしてL級次元航行艦は45隻と他と比べると恵まれた戦力を持っているが、相手はさらに多くの戦力を持っている。これでは到底あのロボットには勝てない。

そこで第23次元方面部隊は本局に応援を要請した。

——時空管理局とメタルクウラ帝国との戦いが、始まろうとしている。

第二話

俺が次元層に巻き込まれた時から3日が過ぎた。

あれ以降、特に何も無く過ごしている。

とは言っても偵察用ロボットがここから340光年離れた惑星からあの宇宙船と同じ形の宇宙船が多数集まっているとの情報が送られてきた。どうやらここが時空管理局の本拠地らしい。それに再攻撃の準備もしているし、あと数日経ったらまた攻撃をしかけてくるだろう。

まああんなポンコツな宇宙船が何隻集まろうがメタルクウラの敵ではないがな。いや、戦闘用ロボットでも倒せるな。

しかし少し気になることがあるな。あの宇宙船には武装らしきものがなかったしだからといって輸送船ではないだろうし大体形が悪趣味すぎる。

後半は唯の罵倒になったがまあどうやって攻撃するのかわからないのだ。

と言ってもまあ大丈夫だろう。ドラゴンボールの世界以外でメタルクウラに傷をつける攻撃なんて滅多に無い。戦闘用ロボットの装甲でさえ怪しい。

だから本拠地に宇宙船がどれだけ集まろうが攻撃はしない。本当は絶好の機会なんだろうがそれじゃあ面白くない。

それに我がメタルクウラ帝国の記念すべき第一戦だからな。船を一隻残らず宇宙の塵にしてやる。

そしてこの一戦が終わったら敵の本拠地に乗り込み占領してやる。

ああ、後時空管理局の宇宙船を数隻拿捕しなければな。ツフル人の科学者達が調べたいと言っていたからな。

因みにこのツフル人達は適当な星を侵略していた時に見つけた。なんでも宇宙旅行に出かけていたから助かったらしい。因みに人数は150人位だ。

このツフル人達もサイヤ人をかなり憎んでおり、俺がサイヤ人を絶滅させようとしている事を知ると自ら俺の勢力に入った。

お蔭で今まで以上に科学力が上がった。

ツフル人達はサイヤ人を絶滅させたらまた自分達の星を作りたいと言いつつ俺もまあ良いだろうとかなり質の良い星を用意していたがゲデスター諸共次元層に巻き込まれ現在に至る。

まあツフル人達はまた探せば良いと気にしてないらしい。

話が逸れたがこのツフル人達の科学者達が時空管理局の宇宙船に興味を持ったわけだ。

だから数隻拿捕する。メタルクウラの瞬間移動で艦内に進入できるから楽な仕事だ。

時空管理局さん、さっさと来い。

第23管理世界『アトランタ』の軍港『カルタヘナ』では、本局からの増援部隊が集結していた。

本局では第23次元方面部隊により送られてきた映像と証言により事態を重く見、大規模な次元航行艦隊を送り込んだ。

その数、XV級次元航行艦46隻　L級次元航行艦156隻

旗艦『セントルイス』が率いる堂々たる大艦隊だった。

これ程までの大艦隊は管理局史上初めてであり、いかに今回のロストロギア事件を重く見たのかが分かる。

因みにXV級次元航行艦の数が少ないのは、最近正式に採用された新鋭艦の為まだ十分に数が揃っておらず、数ではまだL級次元航行艦隊が主力だ。

所変わってここはL級次元航行艦『エステシア』

エステシアの艦長クライド・ハラオウンは深いため息を着いていた。

「艦長、ため息をつくとき幸せが逃げますよ？」

そう言うのはエステシアの副官レオ・ライアン。

「そんなもんとつくに逃げてるよ。全く、もうすぐ産まれるってのに。」

「ああ、そういうばもうすぐ産まれるんですけどな。名前はもう決めたんですか？」

「ああ、リンディと話し合って決めたよ。クロノって名前にしようと思っている。」

「クロノですか、良い名前です。……：そういうばこれから戦う時に子供が産まれると言った人は必ず死ぬという噂が。」

「止めてくれ。」

そう他愛も無い事を話す二人。暫くするとレオ・ライアンは真剣な顔をして話した。

「今回のロストログア事件はかなり厄介そうだそうで。」

「ああ、俺も第23次元方面部隊から送られてきた映像を見たが：ありゃ化け物だぞ。全長何百キロ、いやもしかすると何千キロかもしれんな。それ位デカイ宇宙船が写ってたんだ。流石の俺も度肝を抜いたぞ。」

「…それはまた、一体何所からきたんでしょうか？」

「さあ？何でも大規模な次元層が現れそこから出てきたらしいから
一体何所から来たのやら：」

クライドがそう言い終えると、二人は同時にため息をついた。

——今回はかなり厄介な仕事になりそうだ。

二人はそう思わざるを得なかった。

第二話（後書き）

何か勢いで書いて勢いで発表しちゃったんですけど書置きが溜まってないと落ち着かないので暫く貯めます。次回は多分来年になると思います。

第三話（前書き）

遅くなりましたが、それでは投下いたします。

第三話

「――以上が、今現在分かっているロストログアの情報です。」

ここは第23管理世界にある惑星『ビダリア』その首都である『ボルソン』にある時空管理局本部にある会議室。

ここでは、今回のロストログア事件に対する対策を立てていた。

しかし会議室に居る管理局員の顔は暗い。

「……ここに来る前にあの映像を見たがあの巨大な宇宙船だけでも厄介なのにXV級を撃墜したロストログア反応を発するロボットが無数に居るだ……」

そう言って一人の管理局員がため息をつく。

それはそうだろう。今まで次元航行艦が落とされる事は多々あったがそれでもああも簡単に落とされる事は無かった。しかも落とされたのが最新鋭のXV級なのだ。それだけでも管理局の衝撃は大きいだろうがさらにXV級を落としたロボットが無数に居るのだ。こんな事管理局史上初めてのことであり、だからこそこれ程までの大艦隊を送ったのだ。

「全く。揃いも揃って暗い顔をしゃがって、ここには臆病者しかおらんのか。」

そう言うのは旗艦『セントルイス』の艦長アドルフ・ディートハルト提督。彼は魔法至上主義者であり性格には難があるが、非常に猛将でありその勇敢さが買われ現在の地位に至る。

「しかしディートハルト提督。ああも数が多いと…」

「確かに数は多いがアルカンシエルで消滅させればいいだろう！何のためにこれだけの次元航行艦を集めたと思っているんだ！！」

ディートハルトは魔法こそが最強の武器だと信じ、その象徴たるアルカンシエルには絶対の自信を持っていた。事実、アルカンシエルはその威力をまざまざと見せ付けていた。

「…：そういえば、あの宇宙船には人は乗っているのでしょうか？」

一人の管理局員が思い出した様な顔をして発言した。

「映像にもあった通り何も反応がありませんでしたから居ないんじゃないんですか？」

「しかしもしかすると居る可能性もありますし…」

「ふん！居たとしてもそいつ等は犯罪者だ！あのロボット諸共アルカンシエルで消滅させてしまえ！」

「いや、いくらなんでもそれは駄目ですよ。仮にも次元漂流者なんですから。」

「む、そういえばそうだったな。」

次元漂流者。次元震などの事故で他の世界に転移してしまう人の事で過去に数件次元漂流者が現れている。管理局は次元漂流者は保護する方針でいるため流石にアルカンシエルは撃てない。

「ではもう一度通信を試みて駄目でしたらあのロストログアをアルカンシエルで消滅させましょう。」

因みに管理局は今回のロストログアは全部破壊する方針で居る。保管するにはあまりにも危険が大きい為である。

「では、これで会議を終わりたいと思います。出撃は明日の0060時です。それまで各艦は待機しててください。」

そう言い終わると、各艦の艦長達は自分の次元航行艦に戻っていった。

「ふむ、ようやく時空管理局は準備を完了したか。」

全く、待ちくたびれたぞ。

因みに何で分かったのかと言うと、時空管理局の通信量が目に見えて増えたからだ。通信量が増えるという事は何らかを起こす兆候だ。今の現状で通信量が増えるという事は総攻撃しかありえない。

さて、我がメタルクウラ帝国の記念すべき第一戦になるから気を引き締めなければな。まあ負ける事は無いと思うが。

それにゲデスターの半径500光年に静止レーダー衛星を何億個もばら撒いたし、これで時空管理局が何時出撃しても瞬時に分かる。因みにこの衛星は超小型で1cmしかない。流石技術チートのツフル人。

因みに今回はメタルクウラは使わない方針でいる。あんなポンコツ宇宙船なんぞ戦闘用ロボットで事足りる。物量ではこっちが圧倒的に上だ。あのポンコツ宇宙船がどんな攻撃をしてくるのかは分かんが大丈夫だろう。

ピピッ！

むっ！レーダーに反応が！…ほう、どうやら時空管理局の宇宙船が出撃したらしいな。数は：200隻以上か。ふん、たったそれだけで何が出来るのと言うのだ。これでは拍子抜けだ。

まあ取りあえずゲデスターの周りに戦闘用ロボット200万体を展開させよう。少々過敏戦力な気がするが殺るなら徹底的に殺らなければな。

——これが後のゲデスター宙域の戦いと呼ばれる宙戦である。

第四話

「やれやれ、マヌケな軍隊のおでましか。」

俺はゲデスターを包囲するように布陣している時空管理局の宇宙船を見ながらそう言う。

しかしどの宇宙船も小さいな。ドラゴンボールの世界で見た宇宙船の方がデカイぞ。科学力是对して進んでないようだな。

あゝスーパーノヴァで全部消し飛ばしてやりたいな。でも、ツフル人の科学者達に数隻拿捕して欲しいと頼まれてるし、いきなり消し飛ばす訳にもいかんしなあ。

全く、めんどくさい事この上ないぜ。

…ん？何だ時空管理局から通信が入ってるぞ？いまさら何を話そうってんだ。

まあいいか。奴等の最後の言葉位聞いてやるか。

そう思い俺は通信に応じた。

「全艦、配置にきました。」

「うむ、そうか。」

ここは旗艦『セントルイス』の司令室。

セントルイスの艦長アドルフ・ディートハルト提督は目の前の宇宙船を睨み付けていた。

「図体だけはデカイな…だが今に見ておれ！アルカンシエルで粉々に消し飛ばしてやる！！」

「いや、まだ消し飛ばすとは決まっておりますよ。」

冷静に答えるのはセントルイスの副官カルロ・バルデッリ。彼は少々勇敢すぎるディートハルト提督のストッパー役として周囲に知られており、またディートハルト提督の数少ない友人でもある。

「おっとそうだったな。全く、犯罪者なんぞに情けをかける必要なんぞ無いと思うんだがな。」

「まあいくら次元漂流者とは言えXV級を1隻撃沈していますからね。それなりの罪にはなるでしょうね。」

「ふん、犯罪者にはお似合いの身分だ！」

「…そういえば、宇宙船の周りに展開しているロボットは映像のと

違いますね。ロストロギア反応ありませんし。」

「我々などロストロギアを使うまでも無いと言っているのか？犯罪者の癖に！ロボットなんぞ魔法の前にはガラクタ同然だ！！」

ドン！と机に拳を叩きつけるディートハルト提督。彼にして見れば管理局創設以来の大艦隊が犯罪者如きに舐められているという事が許せなかった。

「落ち着いてください艦長。艦長がそれでは部下に示しがつきませんよ？」

「…ああ、そうだな。すまなかった。」

もし他の者が注意すればディートハルト提督は怒鳴り散らすであろう。しかしカルロには長年共に仕事をしてきた仲として、友として怒鳴り散らす事は出来なかった。

「艦長、これより宇宙船に通信を試みます。」

「うむ。」

ディートハルト提督は女性オペレーターの声に答えるとカルロに顔を向け。

「カルロ。俺はこういう事は苦手だ。お前がやれ。」

そう言い放った。何とも無責任な発言である。しかしいつもの事とクルー達は別に気にしていない。

「まだですか。」

「ああ、まただ。」

「……はあ、分かりましたよ艦長。」

もう諦めたよつという顔をしてそう言うカルロ。

「艦長！通信に応答がありました！映像来ます！！」

突如、女性オペレーターがそう叫ぶと、空中にディスプレイが表示された。そこには一人の男がいた。

「ごきげんよう時空管理局の諸君。こんなに楽しそうなパーティを開いてくれてとても感謝している。」

俺は笑顔で皮肉たっぷりの言葉を時空管理局に放った。

画面に映っている男は少し眉を顰めたがすぐに機械的に返してきた。

「私は時空管理局臨時第23次元方面部隊旗艦『セントルイス』の

副官、カルロ一等空佐です。」

副官だと？艦長では無いのか？俺は舐められているのか？…まあいい、どうせ死ぬのだ。

「俺はメタルクウラ帝国の皇帝、メタルクウラ1世だ。」

俺がそう言うのと男が息を呑んだ。それはそうか、相手は皇帝だからな。因みにメタルクウラ1世というのはさっき作った。

「こ、皇帝陛下でありましたか！失礼しました！」

画面にいる男が慌てた様子で謝る。

「別に構わん。それで、一体何を話そうってんだ？」

「えっと。我々時空管理局は現在ロストログアの確保と次元漂流者の保護を目的に活動しています。」

ロストログア？前に撃墜したポンコツの宇宙船が同じ事をいつてたな。次元漂流者は何となく想像がつくがロストログアは一体何なんだ？

「ロストログアとは何だ？」

「ロストログアとは異世界で高度に発達した魔法技術の遺産の事です。中には使い方しだいで次元世界を消滅させてしまう物もあるので、我々はそれを確保して安全な場所で管理しているのです。」

ふむ、なるほど。確かにメタルクウラは世界を消滅させる力を持つ

ているな。だがメタルクウラはメタルクウラ帝国の戦力の要。渡すわけが無いだろう。

「それで、ゲデスターの中にあるロストロギアを取ろうってのか？」

「はい。時空管理局は全てのロストロギアを確保する方針でいるので。それに管理局は次元漂流者を保護する方針でいるので我々は皇帝陛下を保護するためにも来たのです。」

「断る。我がメタルクウラ帝国は立派な主権国家だ。おまえら時空管理局のしている事は内部干渉だ。それにこっちにはロストロギアを渡す義理も無い。」

「はっ！主権国家だと？笑わせてくれる！」

突如、話していた男の隣に座っている男が話してきた。

「何だお前は？」

「犯罪者に話す名前など無い！」

こいつ、余程死にたいらしいな。

「か、艦長！」

隣にいる男が止めようとするが気にせず話し続ける男。

「我々のXV級を一隻撃沈した時点で貴様はもう犯罪者なのだ！よって貴様の帝国とやらは我々にとって唯の武装勢力に過ぎん！」

「……これ以上話してられん。じゃあな糞時空管理局の諸君。」

そう言って俺は通信を切った。

くっくく。少し情けをかけて話し合いをしたが相手がそう来るならもう遠慮はいらん。いいだろう、木っ端微塵にしてやる！あの宇宙船の様にな！

とりあえず様子見て戦闘用ロボット50万体を突撃させよう。あんなだけ大口叩いたんだ。ガツカリさせないでくれよ？時空管理局さんよ。

第五把

「艦長！何してるんですか！？」

カルロが怒鳴る。それはそうだろう。せっかく交渉していたのにそれをぶち壊されたのだから。

しかし当のディートハルト提督は不機嫌そうに口を開く。

「ふん、あいつはどうせ我々の要求を受ける気は無かっただろう。ならさっさと片付けてしまおうじゃないか。俺の性格は知っているだろう？」

「しかし…」

「カルロ。ああいった輩には何を言っても聞かんよ。それにわざと時間を稼いで何かをしてくるかもしれない。被害を抑えるためにも、ここはさっさと片付ける方が良いんだ。」

「…はい、わかりました。」

ディートハルト提督はこういう時には、中々優秀な人物であった。

「敵のロボットが動き始めました！数は…ご、50万です！！」

男性オペレーターが悲鳴の様な声で報告した。

「慌てるな！数は多いが局地的にはそんなに多くない筈だ！アルカシエルの発射準備！！」

「了解！アルカンシエル、バレッツジ展開！」

その声に呼応するかのように『セントルイス』の前方に3つの巨大な環状魔方阵が発生し、その中心に光り輝く魔力の塊が形成されていった。それと同時に、他の次元航行艦もアルカンシエルを展開する。

「ファイアリングロックシステムオープン」

ディートハルト提督の声に反応し、紫の丸い物体が入った透明の箱が目の前に現れた。

「犯罪者め、己の過ちを後悔するが良い。」

そう言いながら鍵穴に鍵を差し込む。すると箱に色が赤色に染まった。

「アルカンシエル、発射！！」

そう言い、鍵を右に回しアルカンシエルを作動させる。

すると前に巨大な半円体が現れ、それを突き破るように膨大な魔力エネルギーが飛び出した。

その魔力エネルギーは、ロボットの中央に着弾すると強烈な閃光を発したかと思えば周囲の空間を歪曲させ、百数十キロの範囲ごと反応消滅を起こしロボットをこの世から消し去った。

「おいおいマジかよ。」

目の前の光景が信じられなかった。

50万体の戦闘用ロボットがああ艦隊から放たれたエネルギー波によって文字通り消滅させられたのだ。かなりの装甲を誇る戦闘用ロボットがああも簡単にやられるとは…

どうやら俺はこの世界を少々見くびっていた様だ。だが同じ過ちは二度とせん。

俺はメタルクウラ1000体にゲデスターを包囲している全ての宇宙船の内部に瞬間移動をする様に命じる。流石に瞬間移動には対応できまい。しかも相手は戦闘用ロボットより何千倍も強いメタルクウラだ。それが一隻につき約4体。時空管理局はどうやっても勝てないだろう。

メタルクウラ1000体が瞬間移動した数秒後、ゲデスターを包囲していた時空管理局の宇宙船が次々と爆発していった。

数十秒後には飛んでいる宇宙船は僅か数隻しかいなかった。あれはツフル人の科学者用に艦内にいる人を皆殺しにするよう命じたから

だ。

戦いは我がメタルクウラ帝国の大勝利に終わったが俺の心は晴れなかった。

まさか時空管理局があんな強力な武器を持っているとは。これは早くツフル人の科学者に時空管理局の宇宙船を解析してもらわなければな。

そう思いながら俺はメタルクウラを呼び戻す。うん？まだ抵抗している宇宙船があるぞ？無駄な抵抗が好きな奴らだ。まあいい、気晴らしに俺が直々に出向いてやるか。

そう思い俺は瞬間移動した。

「来たぞー！ここで何としても食い止めるんだ！！」

「だ、駄目だ！魔法がぜんぜん通用し、ぎゃあああああ！！？」

魔導師が一人、また一人と倒れていった。

「くそ、何て力だ…」

そう言うのは『エスティア』の艦長クライド・ハラOWN。偶然エスティアは拿捕の対象になっていたため他の次元航行艦の様に爆発させられずに済んだが結果としてはこちらの方が不幸だったかもしれない。

「まさか艦内に進入してこようとは…それにあのロボット艦長の魔法を受けても平然としてますし。」

レオ・ライアンが冷や汗を流しながら言う。クライドはAAAランクで魔導師としてもかなり優秀な部類に入るが、そのクライドの魔法を食らってもダメージを受けている様子がないロボットに乗員全員が絶句している。

「艦内じゃあ強力な魔法は撃てないからな。くそ！これじゃあ全滅だ！」

クライドがそう言い終えると同時に、ピチュンと音を立てて一人の男が現れた。

「何！？お、おまえは！！？」

「やあ時空管理局の諸君、こんにちは。」

メタルクウラ1世である。

「君達が抵抗しているせいで中々落とせないんでね、だから俺が直々に相手をしてやる。まあ俺の気晴らしの為というのが大きいがな。」

「ふ、ふざけるな!!」

一人の魔導師が魔力弾を撃つがメタルクウラ1世はそれを右手で受け止める。

「そうかそんなに死にたいのか。」

そう言うのと魔力弾を撃った魔導師に人差し指を向けるとデスビームを放った。

「ぐはあ!?!」

「がはあ!?!」

その魔導師の後ろにいた人の胸も突き抜きデスビームはエスティアの装甲を貫通し宇宙に出て行った。

「き、貴様!?!」

「喚くな! どうせ貴様らは全員死ぬのだ!!」

「ふざけるな!! 俺の使命は船員全員を無事に帰すことだ! 誰一人死なせはしない!」

「ほう…中々勇敢な奴だ。貴様、名は?」

「クライド・ハラOWNだ。」

「ではクライド。俺と戦い勝利したら全員見逃してやろう。」

クライドにとってはかなり魅力的な条件だった。クライドはかなり優秀な魔導師で実戦経験も豊富にある。それに目の前の相手には魔力が全く感じられない。クライドは戦えば勝つ自信があった。

「いいだろう。受けてたつ。」

だからこそ、受けた。

「ふん、後悔するなよ!」

メタルクウラ1世はそう言うのとクライドに高速移動で迫った。

「ずあああ!!」

クライドの腹に目掛けて放たれた拳は吸い込まれる様に入り、その衝撃でクライドの体は後ろに吹き飛ぶ。

「艦長!!?」

船員が悲鳴の様な声で叫ぶがメタルクウラ1世は気にせず瞬間移動で吹き飛んでいるクライドの後ろに回りこみ、踏み潰した。

「かはあ…!?!」

クライドは床にめり込みながら胃液を吐き出し、悶え苦しむ。

しかしメタルクウラ1世は気にせずクライドの髪の毛を掴み持ち上げる。

「どうした？この程度か？」

「ぐっ…！」

クライドは魔力弾を撃とうとしたがデバイスが無い事に気づく。デバイスが無ければ魔法が撃てない。

「ふん、どうやら杖が無ければ撃てないらしいな。」

そう言ってメタルクウラ1世はクライドの胸に右手を添える。

「じゃあな。」

そう言うとき功波を放ち、後ろにいる船員を巻き込みながらクライドはこの世から消え去った。

「さて、ゴミの掃除も終わった事だし。ゲデスターに帰るか。」

そう言うときメタルクウラ1世は瞬間移動でゲデスターに帰っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6533z/>

メタルクウラ帝国建設記

2012年1月5日09時53分発行